

会議におけるパワー行使と創発的ネットワーク

内田らら・小笠恵美子・金志宣・森下雅子

要 旨

大学の教員会議での参加者は、それぞれ異なる社会的地位にあるが、会話の中で常にそれが顕在化されているわけではない。本稿では、パワーというものを会話を自分の望む方向に持って行く力と位置付け、その行使の方法について分析を行なった。その結果、(1) 会話におけるパワーの行使は他の参加者の承認を得た上で成し遂げられていること、(2) 会話における割り込みでは、相手の発話の中断だけでなく、参加者の反応に見られるトピックの移行によってもパワーの行使やその場その場の地位の変化がより顕在化すること、(3) 状況説明によって物事の決定がなされていることから、会話内での地位の形成は会議で決定される事項に大きく関わっていることを明らかにした。

以上をふまえ、教員会議というフォーマルで社会的地位の順位づけがはっきりしている場面においても、会話における参加者の地位はその都度変化し、創発的なネットワークを作り上げていることを主張する。

【キーワード】パワー行使、創発的ネットワーク、潜在的地位、割りこみ、トピック

1. はじめに

大学の教員会議に出席している参加者は、それぞれ異なる潜在的地位(latent status)⁽¹⁾を持っており、その順位づけは明確である。Sacks, Schegloff & Jefferson(1974, 以下SSJと呼ぶ)は、順番取得システムを、一方の極が日常会話(発話の局所的な割り当て)、もう一方の極がディベートやセレモニー(完全な前もつての割り当て)であるような連続的な配列と見なし、会議をその中間に位置するものとしている。一般的にその会議のフォーマル度が高いほど、参加者の潜在的地位が発話の配分に反映すると言われている。

しかしながら、教員会議において、常に潜在的地位が顕在化されているわけではなく、また常に潜在的地位の順番にパワーが固定しているわけでもない。ある人物の会

議における地位は、参与者全員の協働により、相互行為の中でその都度作られるものではないだろうか。このように相互行為自体から浮かび上がってくる実際の関係を、Watts(1991)は「創発的ネットワーク」とし、そこでは何らかの方法でパワーを行使した結果作られるその場その場での動きが生じるものとした。本稿では、教員会議におけるパワーの行使について分析し、教員間の会話のやり取りの中で、創発的ネットワークがいかに構築されているかを明らかにする。

2. 先行研究

会話におけるパワーや地位について、Bales(1970)は「小集団において、あるセッションのあるメンバーがとった時間は、事実上その間に彼が行使しようと試みた権力の総量を示す直接的な指標である」と述べている。つまり会話における発話量とそれに相当する時間の相対的配分は、パワーや潜在的地位を表す指標の一つである言えるであろう。しかし、このような量的尺度だけでは測りきれない部分があることも否めない。

一方、Watts(1991)はフロアー^②やトピックのコントロールに注目し、家族の会話におけるパワーの行使と構造を分析している。Watts(1991)によるとパワーを持つということは、目的を達成するための行動の自由を持つことであり、パワーを行使するということは、ある個人が他者の利益に反するやり方で他者に影響を及ぼすということである。また、パワー行使が成功したら地位が上がり、目的を達成しやすくするための手段を得ることになるが、失敗したら地位は下がることになるとしている。このことから、地位はパワー行使によって常に変動するものであり、そこで既に存在する静的な関係の潜在的ネットワークと、インターアクションから作り出される実際の関係の創発的ネットワークという概念が重要であるということがわかる。

会話におけるパワー行使の手段として、Watts(1991)が特に注目しているのは割り込みである。その解釈は主に参与観察に基づいており、割り込みによってパワーが行使されているかの判定基準を、割り込まれた者の感情に委ねている。つまり、グループ内における創発的ネットワークにおける地位の変化は参与者の受け止め方に大きく左右されるとしている。Wattsは、パワー行使による地位の変化を観察しようとしているが、制度的場面における地位は固定され、パワー行使は既存の地位の現れに留まっているという理由から、最も制度的場面から遠いと思われる家族の会話を分析対象としている。しかし、筆者は制度的場面においてもパワーが行使されることにより、その

都度創発的にネットワークが形成されているのではないかと考える。

そこで本稿では、決定事項を持ち、潜在的地位の順位づけが明確である教員会議という制度的場面を取り上げることにした。そして、発話量(Bales,1970)や参与観察に見られる参与者の受け止め方(Watts,1991)の観点からの分析ではなく、参与者の意図が達成されたかという見地からパワーが行使されたかどうかを見ることによって、創発的地位の変化を分析する。つまり、潜在的地位・割り込み・トピックの変換などを利用して会話を自分の望む方向に持っていき、最終的決定に導いていくというパワー行使の方法を見ることで、創発的ネットワークがどのように作上げられているかを明らかにすることにした。

3. 研究目的

本稿では実際の教員会議におけるパワーの行使と構造をミクロに分析することにより、教員間の会話のやり取りの中で、創発的ネットワークがいかに構築されているかを明らかにする。

分析観点は以下の3点である

- ①潜在的地位によるパワーの行使が、相互行為の中でどのように成し遂げられているか。
- ②割りこみによって、どのようにパワーが行使されているか。
- ③トピックを変換する行為によって、どのようにパワーが行使されているか。

4. 分析データ

本稿の対象となった教員会議は、1999年11月に教授1名(A)、助教授2名(B・C)、助手1名(D)の計4名によって行なわれた。会議の長さは約90分で、話し合われた内容は、退職する教員(e)の記念講演と懇親会についてである。データの内訳は、会議の録画録音、及び各参与者に対するインタビューである。採取に際して研究目的のための録音、インタビューの許可をえた。

5. 分析結果

5.1 潜在的地位を利用したパワー行使

4で述べたように、会議の参与者4人の間には、明確な潜在的地位の違いが存在する。

Aは教授でありコースの主任であるという、一番高い地位を持っている。また、DとA・B・Cの間には、地位において明確な境界線がある。それはA・B・Cが「××先生」と呼び合っているのに対し、Dのみ「××さん」と呼ばれていること、Dの発話量が他の3人に比べ非常に少ない事からもわかる。

しかし潜在的地位は、会議の進行においていつも顕在化しているわけではない。次の事例を見てみよう。

【事例1】（講演会を辞退した教員に対して、どう対処するかということ話を話して）

01 C：あ、じゃやっぱり遠慮じゃなくて、やっぱり体調かもしれないって

02 B：うん、そうそう

03 C：ふーん

→04 A：その点は一応あれですね、みんな、ま、とりあえずその主任という形でね//最終的に?

05 C： //うん そうですね

06 A：もう近づいているから

07 D：うん

08 : (0.6)

09 A：ね、あ//の一

10 C： //うーん

11 A：まあお話を聞いて、納得してもらおう形で決めるしかないですよ

12 C：うん、そうですね

AはA(04)において、「コースの主任」という潜在的地位を持ち出すことにより、ここは主任である自分に任せてくれという形で、結論をまとめようとしている。この発言によりAは発言権を取得し、まとめ役という中心的位置を獲得することに成功している。しかしながら、Aの会話における地位は、Aの自己申告だけで成し遂げられたのではない。CとDの賛成の表明、そしてBの沈黙によって、はじめて得られたのである。

S S J (1974)は、発話の順番(turn)取得に参与者の社会的アイデンティティの顕在化が関わっている事を示唆している。Aは「主任」という社会的アイデンティティを持ち出し、顕在化することによって、会話における自分の創発的地位を高め、自分の思っている方向に会話の流れを持っていくというパワーを行使した。しかし会話におけるパワーのバランスは常に変化する。相互行為の中で遂行される社会的アイデンティティが瞬間瞬間に変化するように、個人のコミュニケーション上の地位も、それに応じて創発的に変化するのである。

5.2. 割り込みによるパワーの行使

割り込み(interruption)による権力行使の研究としては、West & Zimmerman(1975)、Fishman,P.M.(1978)、江原・好井・山崎(1984)、好井(1991)などの、日常会話の男女差に関する一連の研究がある。また、Watts(1991)は割り込みによるパワー行使を、参与者の受け止め方による解釈を中心に分析している。しかし本稿では、上記のような一側面の分析に留まらず、割り込みと他参与者の反応に表れるトピックの移り変わりという複数の観点から見ることで、そこから浮かび上がるパワー行使の過程を明らかにする。ここでいう割り込みとは、現時点の話し手のターンに侵入して目的を達成する活動を抑制すると同時に、そのプロセスにおいて話し手の face を傷つけ、グループ内の地位に損害を与えるような言語行為を指す (Watts,1991)。

以下では、何らかの意図を持って話し手の発話を中断させる割り込みに焦点を当て、その後の参与者の反応に表れるトピックの移り変わりを通じて、創発的地位の変化を見る。また、それを図示したのが図1である。

【事例2】

- 01 C: ところが、あ//の一、うん、あの、えっと、さっ、え、今日 D に
02 D: //それがですね
03 C: さっきなんですけど、e がね、あの講演会を遠慮させていただきたいと
04 : (2.5)
05 B: うん、まー、ちょっとそりゃ
06 C: うん
07 A: また話が大きくなっちゃうから別にして
08 C: ええ
09 B: あの要するに××××研究会の発表の後の懇親会の持ち方でしょ？
10 D: はい
11 B: //それで
→12 C: //いや、ただでもそうするとそのね
13 B: え、え
14 C: 先生がもし講演をしないって言うんであれば、それをまたなんか考えなきゃいけないんですよね
→15 : (1.0)
→16 B: あっ、そうですね
17 C: うん、これとは//関係なしにね、もう大事なことですよね、そうそう
→18 B: //××××学会そのものをどうするかですよ

	発話番号	トピック	トピックの移り変わり
割り込み 反応 1 2 3	01～03	e の意向を伝える	トピックの提示
	05～11	元の議題に戻そうとする	トピック変換の試み
	12～14	関係性を主張する	トピック変換への反対
	15	ポーズ(1.0)	他参加者の納得・承認
	16	同意を示す	B の納得・承認
	17	関係性を再び主張する	トピック再生の成功
	18	関係性を認める	トピック変換の失敗の認定

図 1 割り込みに対する反応とそれに伴うトピックの性質の移り変わり

事例 2 では、まず C、D が e の意向を伝え、講演会の話を持ち出すが、B(05)はそれが本来の議題ではないと考え、懇親会という別のトピックに変えようとする。しかし、B(11)は C(12)に割り込まれ、途中で中断されてしまう。つまり、B(05,07,09,11)はトピック変換を試みたが、C(12,14)が割り込んで元の議題との関係性を主張することで、その試みは受け入れられない。その後の 1.0 秒のポーズ (15)と、B(16)の納得を表す「あ、そうですね」は参加者の承認と解釈される。また、C(17)が再び関係を力説しており、トピックを維持していることから、C (12)の割り込みは成功したと言えよう。言い換えれば、C が行った B へのパワー行使は成功し、それゆえに C の創発的地位は向上し、B の創発的地位は低下したことになる。

以上のことから、割り込みによるパワー行使を見る場合、単に相手の発話を中断させるという形式的な現象のみならず、それに対する参加者の反応に見られるトピックの移り変わりという内容的側面をも合わせ分析することで、その場のパワー行使とそれによって作られた創発的ネットワークがより鮮明に見えてくることが分かった。

5.3 トピックの変換に見られるパワーの行使

5.3.1 トピックについての考え方

事例 2 の B が、最終的なトピック変換に失敗したため創発的地位が下がったということから、トピックは創発的な地位と密接な関係があるということが明らかになった。Diamond(1996)はトピックの導入をパワーの行使のための行動の一つとして挙げており、トピックを変える際には、ターンを取って他の話者を新しいトピックに導く必要があるため、より強力なパワーが要されるとしている。そこで本節ではトピックの性質に注目してパワーの行使の仕方を明らかにする。

トピックの提示回数と提示者に注目するとそこには潜在的地位の影響が見られる。トピックの提示回数はAが15回、Bが18回、Cが15回、Dが5回であった。Dについては、促されて新たなトピックを提示したものもあり、自分から提示したものは3回に過ぎず、他の3人と比べて際立って提示回数が少ない。この結果は、5.1に見られるような潜在的地位の影響と同じである。

しかし、トピックはどれも会話の中で同じ重要性を持っていると考えることはできない。本稿の分析対象となった会話は会議の場面であり、そこでは、「退職する教授の、退職記念となる研究会、懇親会をどうするか」というはっきりとした議題が存在していた。その議題を中心に会話のトピックの性格を分類すると、①決定事項の具体化に寄与するトピックと、②決定事項の周辺に当たる議題という二つの方向性が見られる。この二つの方向性を考慮して、会話の流れを一部図示したものが、図2である。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
提示者	A	C	B	C	C	D	D	A	D	C	C	D	B	B	D	A	C	B
決定事項	懇親会	講演会	懇親会				無理	挨拶							納得	空き時間		
周辺				遠慮	健康	遠慮			遠慮	変化	急変	体調	その他	心配			気持ち	話の内容

番号	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
提示者	B	C	C	C	C	B	C	B	C	B	C	A	A	A	A	B	A	A
決定事項			お願い	お願い		お願い	お願いの仕方				いつ話す		いつ話す		誰が	いつ話す	どう話す	
周辺	話の場	合宿			コース会議			健康	遠慮	きっかけ		教授会		まだいるか				健康

番号	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
提示者	B	B	B	B	C	B	B	B	B	A	A	B	A	A	A	A	C	D
決定事項									ダメな時	h先生				日程	がんばって			懇親会
周辺	変化	g先生	f先生	どこで	固辞	年二回	f先生	内容			集中講義	他の	集中講義			誕生日	言いたい事	

図2 トピックの性質から捉えた会話の流れ

決定に寄与するトピックについては、CとAが15回のトピック提示のうち11回を占めており、具体的な決定事項に関わりが深いことが伺える。また、その提示の際にも5.1に見られるような潜在的地位を意識した方法が見られた。特に決定事項に関わるトピックではB、C、Dが提示した議題や意見のほとんどが、参与者間で潜在的地位が最も高いAに意見を求める形で発せられている。そして、それらに答えて述べたAの意見が1つのトピックを終結に導き、その場で提示された議題の結論とみなされてい

る。これは5.1に見られるパワーの影響と同様である。しかし、常に潜在的地位の高い者がパワーを発揮しているわけではない。それを示す例を二つ示す。5.3.2では決定事項の周辺に当たるトピック、5.3.3の決定事項に関わるトピックを取り上げ、各トピックにおいて創発的ネットワークがどのようにして作られているかを見る。

5.3.2 周辺トピックに見られる創発的ネットワーク

以下の事例は、議題と関連してはいるが、決定や具体化に直接関係がないトピックの例である。ここでは、会話が行われる前の潜在的地位にとらわれず、そのトピックについてより知識や情報を持っている人を中心にトピックが展開されている。しかもそれは、一参加者が自分勝手にトピック提示と展開を行ったのではなく、他の参加者が承認をしたことによって、その参加者の創発的地位が高められている。

【事例3】（過去に退職した教員による退職時の講義について）

- 01 B: fが固辞したんでしょ
02 : (1.0)
03 C: ああ//そうでしたね
04 A: //で結局、先生、出席しなかったんですかね
05 B: しなかったんです、それでちょうど同じ時期にgがやめ、たん
だけ//どgはああいう形でね(1.0)最終講義、という//よりも
06 C: //うん うん //あつ、うーん
→07 B: 何かちょっと、ね、違う(1.0)形でやったんですね、あれも×××××
会なんですか？
→08 C: うん、そうですよ //×、×、××××会でおやりになりましたよね
09 B: //あ、そうですか、じゃあそこでやったんですね
10 A: うーん
→11 C: f初めてなんですか？それまでは〇〇学科でも全部あの、やってました？
→12 A: やってました
13 C: じゃfが特別//に
14 B: //うん、初めて、のような//
→15 A: //ま、ま、//あの、僕が来て
16 B: //ええ
→17 A: から、少なくともね

この会話例は、トピック39が始まった所からとりあげたものである。以下では、特に2つの部分に焦点をあてる。

はじめに、発話05-08だが、g教員の状況が説明された後のB(07)による確認には、潜

在的地位が最も高いAではなく、Bと同じ情報を持っていると思われるC(08)が続く。そして、このC(08)は、当該のトピックに詳しいと思われるBが提起したトピック(05-07)を展開させるものであり、Bを中心にトピックが進行することを承認していると言える。

次に、発話11-17だが、C(11)には、A(12)が続く。ここで、BではなくAが答えたことは、一見すると潜在的地位が影響を与えているように思われる。しかし実際には、AがBやCよりも長く大学にいるために、より多く情報を持つ話し手として、他の参与者たちに情報を提供していると考えられる。このことは、A(15-17)の「僕が来てから、少なくともね。」からもうかがえる。そして、このA(12, 15-17)は、C(11)に加え、Bが提示した話題に貢献していることから、Aは、Bがトピックを進行させる中心になることを承認していると分析できる。

5.3.3 決定事項に関するトピック

5.3.2のような、周辺トピックで得たパワーは、決定事項に反映させることができる。インタビューによるとCは会議の前からeに講演を頼むという決定を望んでいた。そこでCの話題提示を追うと次のような行動が見られた。まず、Cは始めのうちは周辺に関する話題提示を行っており、議題の設定理由や状況説明に多くの時間を費やしている。また、決定に関わるトピックにおいてもCは決定に至るまで状況説明をしている様子が見られる。次にその例を示す。

【事例4】

- 01 A: お互い納得してね、気持ちよく
- 02 C: ん
- 03 A: 決めたほうがいいですからね
- 04 B: そうですね
- 05 C: うん、までも謙遜するタイプであるとすれば割と
- 06 A: うん
- 07 C: 強くこちらからお願いしたほうが
- 08 : (1.0)
- 09 C: //いいですよ
- 10 A: //そうです
- 11 : (2.0)
- 12 C: うん
- 13 : (2.0)

事例4はトピック35に当たるが、ここでは教員eに講演を頼む方法についてAとCの間で意見の対立が見られるが、創発的地位を得た者はCである。Cは、C(05、07)で議題の設定理由、状況の説明をした上で意見を言うという手順を踏むことによって、他の参加者の同意を得ている。そして最終的にはC(09)において自分の意見を言うというよりもAの意向を窺って潜在的な地位を重んじている形を取っている。

以上の分析から潜在的地位が低くても決定事項から離れたトピックでは情報を多く提示することで会話の中心になれるということがわかった。その場合、決定事項から離れたトピックから少しずつ状況説明を行うということによって潜在的地位の低い者もパワーを発揮するチャンスがあるということが明らかになった。

6. まとめ

以上、本稿では、教員会議におけるパワー行使の方法について3つの観点から分析を行ない、教員間のやりとりの中で創発的ネットワークがどのように構築されているかを考察した。

まず5.1では、主任という潜在的地位を持ち出したパワー行使の場面に注目して、分析をした結果、パワーの行使は他の参加者の承認のもとに始めて成立することがわかった。次に5.2では、割りこみと他の参加者の反応をトピックの移り変わりからみることで、その場のパワー行使とそれによってもたらされた創発的地位の変化が浮き彫りになった。そして5.3では、潜在的地位が顕在化している物事の決定に関わるトピックと、潜在的地位が見えにくい周辺トピックの事例を取り上げ、創発的地位の形成が会議で決定される事項に大きく関わっていることを示した。

このように、教員会議という潜在的地位のはっきりした制度的場面においても、会話のやり取りにおける参加者の地位は、静的に固定されてはおらず常にダイナミックに変化している。本稿で扱ったデータは教員会議の1つの事例に過ぎず、一般化を求めるものではない。しかしながら、あるグループにおける成員の相互行為を注意深くミクロに分析することは、その現場に特有の意味や方法を捉えるだけでなく、誰もが知っているけれども気づいていないルールを浮き彫りにすることとなる。会話におけるパワーの行使とはいったいどういうことを意味するのか。本稿はその問いに対して1つの見方を示す事ができたのではないだろうか。

注

- (1) もともと存在する社会的で静的な地位で、性別、年齢、職業などが挙げられる。本稿では、「教授」「助教授」「助手」という順位づけを指す。
- (2) Edelsky(1981)は、フロアーを「会話中の心理的または空間内で認識される（トピック・機能・その両面）今進行していること」と定義する。
- (3) 本稿では村上・熊取谷(1995)をふまえ、「話し手と聞き手のやりとりからなる発話のひとつとまとまりの中で、言及の対象となっている、ある特定の事柄」とする。

参考文献

- (1) 江原由美子・好井裕明・山崎敬一(1984)「性差別のエスノメソドロロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」『現代社会学』18, アカデミア出版会
- (2) 村上 恵・熊取谷 哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62
- (3) 好井裕明(1991)「男が女を遮るとき—日常会話の権力装置」『排除と差別のエスノメソドロロジー』新曜社会議
- (4) Bales, R.F. (1970) *Personality and interpersonal behavior*, New York: Holt, Rinehart & Winston.
- (5) Diamond, J.(1996) *Status and Power in Verbal Interaction*, John Benjamins Publishing Company.
- (6) Fishman, P. (1978) *Interaction: the work Women Do*, Social Problems 25, 397-406.
- (7) Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. (1974) *A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation*, Language 50(4), 696-735, in Schenkein(ed.).
- (8) Watts, Richard J. 1991. *Power in Family Discourse*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- (9) Zimmerman, D.H. & West C. (1975) *Sex Roles, Interruptions and Silence in Conversation*, in Thorne & Henley(eds.).

<事例で用いられている記号>

本研究の会話の事例では、分析の目的に合わせ、音の延ばしや呼気音など細かい点は記していない。使用した記号は以下の通りである。

→ 分析の内容を説明するにあたって注目すべき部分を示す。

// 参加者の言葉の重なりが始まる個所を示す。重なりのある部分の後の発話は、わかりやすいように同じ位置より始めている。

(例) A : 誰もいなくなることは//あまりないと思う

B : //考えにくいわけだから

(数字) その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。ごく短い間合いは「、」で示す。

? 語尾の音が上がっている事を示す。

e, f, g 人名を示す。

×× 固有名詞を示す。

(内田—日本女子大学大学院、小笠—国際学友会、金・森下—お茶の水女子大学大学院)

The Exercise of Power and Participants' Emergent Network in Faculty Meeting

UCHIDA Lala; OGASA Emiko;
KIM Jisun; MORISHITA Masako

Each participant in a faculty meeting is in different social status, but it is not always crucial in a conversation. The authors, then, define power as the capacity to bring conversation to desired goals for one of the participants to analyze the way that power is exercised. Through the analysis, they show the following three results: (1) Social role of the participants is used for exercising power in the conversation. (2) About interruption, not only interruption itself but also others' reaction to the interruption or changing topics clarifies the exercise of power. (3) The explanation of circumstances leads to the final decision in a faculty meeting and the fact makes it clear that the formation of the participants' status in the conversation bears a deep relation to what is decided in the meeting. Based on these three results, the authors argue that a participant's status in conversation changes from occasion to occasion to create the emergent network among the participants even in a faculty meeting which is systematic and reveals their ranks in latent status.

(UCHIDA: Graduate School, Japanese Women's University; OGASA: The Japanese School of the International Students Institute; KIM, MORISHITA: Graduate School, Ochanomizu University)